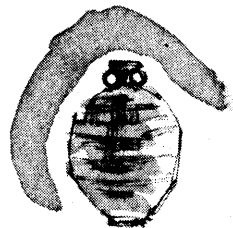


◇講演◇

# 昔話のユング的解釈・その二

## 貧乏神の話



### かまど―聖なる場所

昨日は怠け者の話をしてましたが、昨日言っておりました貧乏神の話（岩波文庫のおとぎ話の第三巻）をちょっと解釈してみます。あるところに若い夫婦者が住んでいました。妻はしょうたれ、無精者で、お茶を飲んだらお茶がらを、ごはんを食べたら食べ残しを、くどの前へ捨てていました。そこでしまいは貧乏神がつけこんで、その家にはびこっていました。というのですけれど、まず、夫と妻、これが最初の登場人物です。ところで、この妻が無精者で何でもくどの前に捨ててしまう。くどはかまどのごとでそこは非常に大切なところです。火をたく

### 河合隼雄

ところなのでですね。家の中心はどこかということとは非常に大切な問題ですけれども、やはりひとつの大事なこととして、火をたく場所だという意味で、かまどが考えられます。

その火についてはあとでいいますが、人類にとって非常に大切なものです。火を自由に扱えるのは動物の中で人間だけです。だから火を扱うようになったとか、火をもたらすとか火を獲得するということは、結局人間が動物と同じということではなく、人間として、ある意味では自然に反するものとして、文化をもつものとして出現してくる、話のはじまりなわけです。だから人類はいかにして火を獲得したかということがギリシャ神話で有名な、プロメテウスの話にあります。あるいは、火が

なかったところへ、鳥が火をくわえてやってきたという話がシベリアの方にあります。鳥というのはまっ黒ですけれど太陽と大いに関係があるのです。ともかく火をもたらすことは非常に大事なことです。そうすると家の中で常に火のある所というのは、聖なる場所ということになります。

今はもうわれわれの生活で、普通の場所と違って聖なる領域などというのはほとんどない。そういう所、皆さんの家で神棚とか仏壇ありますか。ある家でもそんなところはクモの巣がだいたいぶかかっている所だと思えます。(笑い)たとえば神棚があっても、毎日とか毎月一日には燈明をあげて拜んでなどという家は非常に少ないと思えます。あるいは、われわれが神社やお寺を訪ねて行っても、それが聖なる場所であるということを忘れている場合が多いですね。お寺へ行くのが好きな人がいますが、これはお寺詣りにいくのではなく、お寺見物に行く人が多い。観音さんとか、奈良の大仏とかいって行く時でも、美術的な興味の方が多いのじゃないかと思えます。

そんなわけで、聖なる場所というのをわれわれはほとんど忘れかかっています。しかし昔の人たちにとって聖なる場所というのは確実にありましたし、私の母親の子どものころはもっていたと思います。たとえば、正月には、注連しずなかざりをおくどさんにまつって、そこへ燈明をともして拜むのです。何をかがむ

かというのと、へっつい、かまどを拜むわけです。かまどにはかまどの神さまがおられる。かまどのあたりをよこしたら、そんなことするとかまどの神さんにおこられるとか、かまどの上に腰をかけるとうなることかわからないというぐらい、恐ろしかったのです。そういう非常に聖なるかまどの神がいる所へ、ものを投げていたというのですから、これはよほどの無精者ということになります。よほどの神を恐れぬ無精者です。無精者もその辺までいくとまたおもしろいことがでてきて、今度はかまどの神ではなくて、神さんは神さんでも貧乏神というやつが家へ果食うてくるのです。

#### 人間の中の男性性・女性性

ここで少し解釈を試みます。話の主人公はこの男ですが、奥さんが無精者で、そのために貧乏神が宿ったという、これを心理的に考えると、はじめに言ったと思えますけれど、この話全体を一人の男の物語、一人の男の心の中の物語と考えてみるとどうでしょうか。男性というものは女性的な考え方とか、ものの見方とか女性的な感じ方にとりつかれると怠けることが多いです。皆さんは男性でないからわかりにくいと思えますけれども前回の話をもう一回いいますと、王さまと男三人がいたでしょう。それでこのお話には女性原理が欠けているから女性原理を

もたらずような王さまでないといふ。一番怠け者をえらぶというのは、それが一番女性に近づきやすい男です。

(笑) 女性原理を持つ男です。ぼっちりやって、ぱりぱりっと、仕事をやる、これは男性の役割だとぼくは思っています。そうですね、ぱっぱとやって早く課長になり部長になり社長になり、そして家来をあごで使って仕事をする。これは男性的な仕事だと思えます。それに対して女性的な生き方というのは、ぱりぱりもりもりやるのではなく、ぱりぱりもりもりやる人の入れ物になるというか、前に「無為にして化す」という話をしましたが、なにもしていないようで、誰か行動していく人の入れ物になっているという生き方と違っていいと思えます。ここで間違えないようにしてほしいことは、われわれは一応、男性的、女性的と名前をつけていますが本来はどうかのかわかりません。なんとなくそう思っているわけです。

女の人でも男性的な生き方が得意な人、男の人でも女性的な生き方が得意な人もいます。けれども総じてぼくが今男性的という方が男は得意で、女性は女性的な生き方が得意です。そして、その時代によってどちらかの生き方がなくよい生き方であるとか、おもしろい生き方だと、時代の精神として皆が思っていることがあります。たとえば現代だったら男性的な生き方の方に魅力を感じる人の方が多いと思います。そうじゃないです

か。私がこういう話をするだけで腹の立つ人があるかもしれない。せん。(笑い) 私は女性だけどちらを選んだ。それがどうして、男性的なのかと腹の立つ人はすでにそう思っているわけですし、そういう時代が来ますと、女性だってできるじゃないか。どうして女子大へ行って何が悪かろうとって皆やって来たわけです。

いわゆる学問というのは男性的なものです。ところが学問に感情を入れなければならぬというのは女性的な面も入れこもうということになります。だからユングの心理学は女性性ということを、ものすごくとりあげたヨーロッパでは非常にめずらしい心理学とっていいです。フロイトの心理学は男性の目から見た心理学ですけども、ユングの考え方の中には女性的な見方が入っているわけです。ところで、男性というのはなるべくそういう因子をなくしてがんばろうとすると、たとえば、私という人間は男としてもかく一応の成功をしようと思つたら、一番よい方法というのは女性と縁を切ることです。だから女性なんていうのには目もくれずひたすら勉強し、そして結婚なんていうばかげたことをせずに、そうですね、うっかり結婚して、本を読んでいたら奥さんがやってきて、あんた何してりますの。(笑い) 今度日曜日遊びにいきますかと言われる。そんなのに目もくれず、ひたすら学問をして偉くなっていく人もあります。ところがそういう人は非常に一面的です。そんな

人が学者の中におられると思います。そうして幸か不幸か一生  
そうして生きて死んでいく人もいます。そしてまたおもしろい  
ことに、こういう人で結婚している人もいますが、その人は奥  
さんを人生の伴侶としてではなく、仕事をやりぬくの都合の  
いい小間使いとして結婚しているのです。ところが人間対人間  
としてこの女性と話し合いをはじめようと思つたら、学問は大  
分駄目になるかもわかりません。ところで、こんな人はユング  
に言わせると、あまりにも人生の半面しか生きていない。すべ  
ての男性はその心の中に無限の女性的な生き方なり感じ方なり  
を持っているというのが彼の考え方です。また、皆さんが女性  
として生きていこうとした場合でも、男性性というのが心の中  
にあるわけです。しかし、心の中の女性にうっかり取りつかれ  
ると大変なことになる。たとえば、私が心理学の勉強をし  
てネズミはどこを走つてどういつて誰が三番で四番であつたか  
というような研究をする。これを学会に発表して一番や二番や  
と思つているうちはいいが、そのうち、「こんなネズミのことや  
つて何の意味があるのでしょう」(笑い)てなふうになんか心の中  
の女性がいい出すのです。こいつの言葉を聞き出したらなんにもで  
きなくなります。ぼんやりと考えこんだり、今までしてきたこ  
とがすべて馬鹿らしく見えたり、何も手がつかなくなります。

## 退行— regression

そういう状態になつた時、これを心理学的にいつて regress-  
ion といひます。退行といふのでご存知でしょうが、結局自我の  
方にあつたエネルギーが、無意識の方へ流れてしまつて、自我  
をコントロールできるエネルギーが少なくなるから何もできな  
くなるのです。皆さんだつてこの退行を体験するでしょう。似  
たことをやっているとありますが、女性の場合は非常に複雑で  
す。とにかく男性の心理を語るのはいやしいのですが、女性  
の心理を語るのは非常にむずかしいことです。さつき言いまし  
たようにユング派の人たちといふのは、ユング自身もそうです  
が、女性の心理をもつてよく考えた人ですけれど、ユングの本  
を読んでもどうしてもやっぱり男性の方を書いた方がよくで  
きます。つまり男性の心の中にある女性像、つまりユングがア  
ニマとよんでいるものについて書いてるのはよくできています。  
しかし、女の人の心の中にあるアニムスのことになると、ペー  
ジ数が少なくなつてきます。たとえばぼくの「ユング心理学入  
門」でも女性の心の中のアニムスについてのべてあるのが少な  
くなり、女性の読者から残念だと言われたことがあります。こ  
れは、ぼくはアニマは非常によく知っていますし付きあつてい

る。ところがアニムスさんの方はなんとも。すると、女の人が本を書いて、アニムスのことを書かないかと皆思うでしょ。ところが非常に不思議なことにユング派の女の人の書いた本をみても少ない。これは本を書くという仕事にのり出すこと自体、これは男性的な仕事だからと思います。だからどうしても本を書く時は、漠然とわけのわからないことは絶対かかなくて、筋が通って論理的に書こうとする場合、これを書くのはものすごくむずかしいです。女として皆さんは自分の心の中に男性が住んでいることをよく知っていると思いますし、だからこそお茶の水へ来たかと思えます。ところでユングははっきり言っていますが、今までたくさん女性の性に出会ったが、いまだにアニムスのことを明確に話のできる女性に出会ったことがない。それほどアニムスというのは捕えにくいものだと思っておりますが、皆の中で誰かがんばってアニムスについて物語を書いてください。ばくは読んでみたいと思います。

女性もアニムスにとりつかれると退行をおこします。同じ退行でも男性の場合とは内容が違ってきます。どんなのかというと、アニムスにとりつかれると、私も大学へ行って研究をしてがんばって博士になってあるいは代議士になってとか、男性的な仕事をバリバリやるのを空想して、そして結局は何もしない。先日、九州大学の村山さんの発表された学校恐怖症の事例で、

中学一年の女の子が「諸君とアリ」という童話をつくったことを話しました。あの話の中でおもしろいのは諸君という語が何べんも出てくる。「諸君とアリ」という題でわざわざあの子は諸君という語を強調している。そして、諸君という語を言いたくても言えない。皆さんは中学のころぐらいに、一度皆の前で「諸君」とやってみたいなど思ったことありませんか。女の子ってなかなかそれができないんですね。ここにこととして「皆さん」と言う。その時、そんなのをやめて「諸君われわれは」といいたい。それはなぜかという、明日の「眠りの森の美女」の話の中でもいいと思いますけれど、思春期に大体皆この心の中の男性を感じているはずなんです。その時に児童会の会長になってがんばった人もこの中に大分いるだろうと思えます。そして、女の子なんかけとばしてがんばった人たちは第一回目のアニムスのアタックを受けたのです。この学校恐怖症の女の子はアニムスのアタックを受けて「諸君」とやりたいのにできなくて、ものすごい退行をおこしている。そしてその退行の中で諸君という童話ができるのです。諸君という童話を書きながら、学校へも行けないというのはよくわかりますね。

ところで、話をもとにもどしてこの物語の主人公はだんだんと貧乏になっていくのですが、それはなぜかと言うと、アニマ像のためにエネルギーがものすごくとられて、意識内のエネルギー

一が少なくなっている。そんなふう心理的に考えます。それが話のはじまりです。そして次第に貧乏になって、しまいははどうにもこうにもしょうがなくなつて、正月が近づいても餅もつけぬということになりました。

ここで正月というのは新しい年を迎えるということですが、今は違いますがぼくの子どものころは正月になると皆年をとつたのです。日本人である限りはみんな一斉に年をとつたわけですから極端にいいますと十二月三十一日に生まれた人は生まれながら二日目に二つになったのです。正月といつたらわれわれ東洋人、日本人にとっては西洋人よりもはるかに大切な日です。つまり新しい時がある。退行のきまるところ、どこかで反転現象がおこるのです。反転現象がおこるときは年が改まるときです。この男性にとつても年があらたまろうとしているのです。ある人にとつての正月、つまりその人が今日限りもつとがらばろうとする日なら、そういう意味で正月になるのです。だから、そういう人の正月と考えてもいいし、あるいはその人の誕生日というのが非常に大きい意味を持つ場合もあります。何かやっぱりここに一つの区切りがある。人間というのはやっぱり区切りというものを持たないためです。このような意味で大晦日の晩に誰かがやってくるというテーマの童話が日本にたくさんあります。「大年の客」というテーマです。(関敬吾著「日

本昔話集成」に大年の客の話がたくさんついています。)

### 火を燃やす— progression

退行もきまるところまで来たところと、座板でも燃やそうと、座板を白いの、親父はまきもないので座板でも燃やそうと、座板をはがしてぐどにくべてあたっていたということです。何にもしない人間がとうとう火を燃やし出したわけです。主人が無精な奥さんとはかくとして、心の中に火を燃やそうとしたのです。火というのは先ほどもいいましたように非常に大切な意味をもってきます。「火の精神分析」という本があります。バシユールという人が書いたもので、興味のある人は読んでみてください。その本にプロメテウスの話も書いてありますが、われわれ人間全体にとって火というのは非常に大事なものです。

さて火は心理的に何を意味していると思えますか。心に思い浮かべるものは、そうですね、エネルギーだとかパッションとか。長嶋はもえていた(笑い)という表現もありますね。それに、火の暖かさよりも火によって転ずること、一番初めやみだつたところに火をもちこむことによって、照らすことができる、というふうな、われわれの無意識の世界を意識化するというふうな意味も大きいわけです。それからどんなものがありますか。火の悪い面ですか。これは悪いことというたら

破壊しますね。つまり燃えつくして全く無に帰することができ  
るのです。この前お月さんの話をしましたが、月というのは生  
のシンボルであり死のシンボルだといいました。このようにシ  
ンボルのむずかしさというのはいろいろな意味をもっているか  
らです。火は無に帰するというような、あるいは破壊させると  
いう意味があるのです。シンボルというといろんな意味がある  
ので、単なる破壊じゃなく、無に帰してしまつて火で全部もや  
してその中からでてくる、フェニックスのような、そこからも  
う一ぺん生まれかわる鳥ですが、そのように生まれかわる――  
浄化ということもあります。

同じ火でもいろいろな意味がありますけれど、この場合は  
エネルギーという感じが強いですね。退行してアニマの方にも  
のすごい力がかかっていたけれども、とうとう正月が来るので  
エネルギーがやつと動き出したということです。

プロメテウスが獲得してきた火なんというのは、むしろイブ  
の食べたリンゴと同じようなもので、本当にものすごい強いの  
です。わが国の例でいいますと、八百屋お七の話がありま  
すけれど、これにはいろいろな意味が入っています。つまりあ  
の時代において恋をするということが、どれだけ一人の女性に  
とって意識的に人生を生きるということにつながったか。無意  
識に生きている人は、親のいうままに見合結婚をしています。

その中で恋愛するということは一人の女として生きる、つまり  
意識をもって、自我を持って生きるということです。八百屋お  
七の放った火というものはあるいは意識、エネルギー、パッシ  
ョン、破壊のすべての意味があつたかもしれないと思つて、そ  
んなふうな小説とかおとぎ話を読むことは本当におもしろい  
です。放火ということが大きい意味をもってぼくらの心に訴えて  
きます。だから放火犯人に会つた時も、ぼくはこういふことを  
考えているわけです。なぜこの人が火をつけたのか、悪い事を  
するにしたつていろいろな方法がある中で、他ならぬ火をつけ  
るといふことをこの人が選んだのは、一体火の中に何を見よう  
としたかといふことをものすごく考えるのです。そう思うと放  
火をした人の気持ちといふのはわかる場合もあります。

ところで今の場合にはエネルギーという意味が非常に強い。退  
行しておつたエネルギーが今度は自我の方へ帰ってくる。これ  
をユングは *proressions* (しょうがないので進行と訳します。  
退行に対して) この人が床板をめくつて火を燃やしたというこ  
とはむちゃくちゃでしょ。要するに燃やすものがないから、燃  
やすものはそれしかない。ところがね実際経験するとわかりま  
すが、最後のドタン場のむちゃくちゃといふとここまで行かない  
と、人間というものは立ちあがれないのです。私は心理療法  
をやっているわけですが、実際にやっていますと多く

の人が退行して落ちていきます。そして落ちつく先は死のうとさえ思います。貧乏神にとりつかれて元気がなくなつて、そして多くの人が死にたいと言います。そして中には「私がこの世にいたくなくなることがすべてを解決することだと思ひます」という人もいます。そんな時、ぼくらはなかなか死ぬのをとめませ

ん。つまり、早くとめてしまふと話が始まらない。よく死ななきゃ治らないと言いますが、要するに死んでもらわなければ治らないのです。だから皆さんはそういう体験があるかどうかわかりませんが、本当に一人の人がずっと *regress* をおこしますと、こんなにつまらない人間なら私は死んだ方がいいとか、もう自殺しようと言われます。これを聞いて、いやいやあなたにはいいところがあると私が言いましたら、そうかなとほんの浅い人格変化しかおこらないわけです。深く変わつてもらおうとしたら、深く落ち込んでもらわなきゃ困るわけなんです。そうすると死ぬとは言っているけれども、死なないと思つている限りぼくは、とめずにいるわけです。とはいふものの、実際は死ぬと言われるとこっちは胸がどきどきします。というのは本当に死なれたらカウンセラーとしては大失敗です。だから、そんな人格変化なんて言つてはいられない。そこで親にも会ひにいつて、死ぬといつてますからとめてくださいと言おうとか、これはとめねばならないと、カウンセラーも決心しそうになつ

たとき、状態が開けてクライエントがさあつと変わつて来ることもものすごく多いのです。そして、もう死ぬ気はないとか、がんばつて生き抜きますとか変わつてくることがあるのです。こういうときがこの物語りの中の床板を割つて燃やす時に相当すると思ひます。

これは、いろいろな偉い人で自殺しかけて立ちあがつてがんばつた人とか、もう病気で死にそうになつて医者から全部見放されてしまつて立ちあがつた人の伝記とか手記を皆さんは読まれたことがあると思ひます。非常におもしろい転回点というのがあるのですね。それが床板を燃やすところなんです。ここで、床板を燃やすファイトの残つていない人はみんな死んでいくわけです。やっぱりここで、出て来た火というものは、エネルギーともいえるし意識とも言えるし、よし、やつていこう、考えていこう、意識していこう、つまり無精者のアニマの言うままにダラダラと生きていくのではなく、ここに一つの火をともしようというのをやつたとみていいです。そして、そういうふうなことをやつたら、貧乏神がこのこ出て来るわけです。

## 老 賢 者

貧乏神というののも心の中に住んでいる一つの面白いやつですが、複雑な人格を持つていて、ある意味ではこいつがおるため



に全く貧乏になったとも言えるし、こいつがよいことを教えてくれたためにこの人はあとで、金持になるわけです。だからそういうおもしろいパラドックスをもっていて、貧乏の種にも金持の種にもなりうる男、きたなくて、年よりで、そういう最高の知恵をもった人。よくおとぎ話の中にでてくるでしょう。少年は疲れて眠りこけました。そうすると杖をついて、一人のおじいさんがでてきて、よい知恵をさずけてくれました。……というような老人、これをユングは老賢者 (old wise man) とよんでいます。old wise man という老賢者のイメージ、これは東洋人である限り非常によくわかるんじゃないかと思えます。Great Father 偉大なる父という言い方をすると、そういうイメージは日本人にはなかなかわかりにくいのですが、老賢者というイメージは皆持っているだろうと思います。

皆さんにはそういうイメージはありませんか。年をとって非常に賢くて何を聞いても教えてくれるし、なんでも知っているし、よくわかる人。たとえば皆さんは大学に入学してきた時に、一年生か二年生あたりのうちは老賢者のイメージをだれかの教授に投影することはおよそありうることです。その先生の言われることは絶対にはまらがないように思うし、何かあった時にその先生を訪ねて行ったら、はいこうしなさいと言ってくれそうな気がする。そしてなんと素晴らしいと思って三年つきあ

っているうちに、どうもそうでないことがだんだんわかってくる。(笑い) つまり、老賢者などというのはこの世には実在しないのです。昨日言いましたように、もう一つのイメージ、たとえば原型的な子ども話をしました。archetypal child などというのはいないのです。いないけどぼくらの心の中に住んでいるからどうしてもあちこちいるように思うのですね。老賢者というのとはぼくらの心の底の底に住んでいるのです。ところがそれをわれわれは誰かに必ず投影します。ある教授とか、あるいは時には実際に会ってなくてもある本の著者とか。そして、よくあることです。本を読んだだけで著者を知らんまに年よりだと勝手に決めている人がいます。そして会ったら、若いなあ(笑い)。年もなんにも書いていないのに年寄りだと決めている。そういうふうなことが起ります。

こういうことで非常に私がおもしろいと思っていることにたとえば老子のイメージの問題があります。老子が本当にいたかいなかったかははっきりとはしません。実際にいたかいなかったが大問題ですけれども、今はもう完全に老子というのは非常にたくさん人の心の中に生きています。いたことになってしまっているのです。道徳教という本はあるのですけども、その本はいったい老子という人が書いたのかどうかかわからない。しかし、この道徳教という本があったからそれ以来何人もの中国

人、日本人がその著者に投影して老子というイメージを作りあげてしまっているのです。そうすると老子というのは絶対にいたことになっておりますけれど、現実には一体どんな人だったのかはつきりとはわかりません。しかしそれは、皆の *old wise man* のイメージをきれいに吸収してできあがったわけです。老子のイメージというのは、どの時代からどの時代にどう変遷してきたか。研究するとおもしろいと思います。きょう昼から浦島太郎の話をしますけれども、浦島太郎の中でも乙姫の像というのは、すごく変遷するわけです。その変遷について話しますけれども、老子について考えてみてもおもしろいんじゃないかと思えます。

ところでこの *old wise man* ですが、この貧乏神は *old wise* だけでなく、ちょっとへんてこな所もあるのですね。これは実際にわれわれの心の中に住んでいる *old wise man* は、あまりにも *wise* すぎて、賢明すぎて、われわれ人間の知恵からいうとそれが当たっているのか当たっていないのか、いいことなのか悪いことなのか、時々わからないことを言う傾向があります。皆さんは心の中の *old wise man* と話をしたことがあまりないだろうと思いますが、もしよかったら時々聞いてみたらいいかわかりません。お茶の水女子大やめましょかというところ、やめやめって言うかわかりません。(笑)

この場合、貧乏神のパラドックスという面が非常によく出ていますけれど、確かにわれわれの心の深い知恵というものはパラドックスに満ちています。簡単にスラスラわかったらぼくらの人生は、もつとうまいこといくはずですが。どうもわからんところが多すぎて本当に困ります。ここでのパラドックスは、はじめ貧乏神だったやつがここで非常な知恵を持ってきてくるという点にあります。そしてどう言ったかというところを一升買ってこい。そして一緒に飲もうじゃないか。ここでまた大事なテーマ「酒」というのが出てきます。

### 酒 — transform

酒はおみきという言葉もありますが、これは米の中のエッセンスですから、これは本当に *spirit* ということを示す象徴としてよく出てきます。ワインも同様です。結局米というのは土から出てきたものですけれども、それをもっと精選してその最も純粹なところだけをとったものが酒ということになりますから、そういう土からだんだん離れてもつともっと精神的な *spirit*、*rain* なものになっていくことに、酒やワインの意味があります。だからとうとう火を燃やしたところで本当の *progression* (進行) がおこってきたわけで、この老人から酒をもらいたいということは、とうとうすごいエネルギーがこの自我の中に流

れこんできたということです。

ここで、この老人は殿さまのかごに向ってなぐりこめとということをやわげですね。これが昨日ちよつと言いましたけれどもある程度時代を反映しているところです。殿さまに対してはなぐりこむどころか皆がおじぎしているのに、頭をあげているだけで殺されたかもわからない時代に、殿さまに向かつてなぐりこむというものすごく思いきったことをしなければならぬ。この人も、今までの生き方のルーリング・プリンシプル（指導

原理）というのを打ちこわしてしまわねばならない。もう一度ちがう生き方、全くちがう生き方に挑戦する。今までのこの男の生き方というのは、無精者の奥さんと一緒に住んでそのながままに生きてきたわけですね。それを全くやめようと思つたら、猛烈なことをしなければならぬ。まずそれは第一に、奥さんを離縁しなければならぬ。暇を出せと言われてポツと暇をだします。それからその次に殿さまをなぐれというふうなすごい、男性として最も男性的な仕事をしなければならぬ。

王さまを殺すというのは、昨日もいいましたように大切なテーマです。そして殿さまや王さまを殺して自分が王になるというのは男子にとって一生の念願でしょうね。いつかは王を殺して自分が王になってみるというような願望が、我々男性の心の中にあると思います。男である限り皆あると思います。女性で

もアニメムスにとりつかれたら、必ずそれが出てくると思います。こういう願望を持っていますけれども、私の自我があつてコンプレックスがあつて、いろいろありますから、それがだんだんと自我のところまであがつてきた時にはかわつてきて、せめて学会でかつこのいいことが言いたいなと思うくらいになります（笑）。あるいは、ある女性を獲得して結婚しましょうとか。そういうようなことに変わつてきて、そしてめでたしめでたしで終わるわけです。

ところがこのめでたしめでたしにならなくて、この衝動が真正面に自我におそいかかるとどうなりますか。そしたら本当に王を殺して自分が王になろうと、つまりこの社会を全く変えて自分がその変えた社会の大將になろうと、などと簡単に思いますが、その時に人を殺すということはなんでもなくなりません。それで実際に想像を絶するような殺人事件が生じたりします。本当によくわかりますね。完全にとりつかれた場合というのは、人を殺したことに對するつらさとか恐さとかはなくなりません。ものすごく恐いことです。だからわれわれはそういう無意識的な元型的（archypal）いろんなものを心の中に持っていますけれども、これをなんとか人間のものにするために非常に苦労しているわけです。しかし、若い時というのはこいつにパーンといかれるわけです。そしてこういうふうにいっただんいかれ

てしまった人を、外から変えるということはほとんどぼくはできないと思います。こういう人たちを変えようとするならばやっぱり異性の力です。だから女性がいりこんでくると話がややこしくなってきました。そしてお互いに殺しあったりしなければならなくなってきました。そこでうまくいけば皆が trans-form(変容)することができるのですけれどもうまくいかなかったら非常に悲惨なことになってしまいます。transform することができずに。

このお話の場合は非常にうまく transform することができません。この男。このへんが昨日から言っているようにおもしろいところで怠け者というのは、いざとなった時にがぜん活躍しだすことです。このいざとなった時に活躍しない怠け者は本当の怠け者で、これはもう話になりません。(笑い) いざとなったらがんばろうと思っていたけども、いざとなった時死んでいたというのでは話になりません。(笑) だからこの人も、貧乏神の言うことにはさからうわけにはいかないと思ったところがおもしろいところです。つまり、こういう貧乏神が出てきて命令した場合には、いくら考えても殿さまをなぐるなどというところはおかしいと思うのだけれども、やっぱり貧乏神が言うならばやってみせようという。ぼくらの一生の中で時々そういう時がきます。皆さんだっっていつか来ると思います。どう考えたっ

てこのおかしな男性と結婚するのはおかしと思うのだけれども、友だちもおかしいと言っしお母さんもおかしいと言っのだけれども、心の中の貧乏神が行けという場合がありますね。そして結婚して貧乏になったりします。(笑い) その折に貧乏神の言う方がいいのかお母さんが言う方がいいのか、これを判断するということはたいへんなことです。しかしこれはやっぱりわれわれは判断し、責任をもってやっていかねばなりません。

この場合は判断してついになぐろうとしたが、誤って先ぶりをなぐりましたということ、よくわかりますね。これは手が震えたのですね。(笑い) 真中をなぐれなかつたのです。実際そのとおりです。実際こういうことは人生によくあります。あいつをやっつけたら絶対にいいっていう時に、なかなかその中心人物にあたってゆけないものです。たとえばわれわれが一番大事な大喧嘩をしなければならぬという時に、敵の大将に迫って直接に文句言ったらよいときでもなかなか言えませぬね。大将によう言わんから、けらいにちよつとやうてみたりして、やっぱり敵の中心に突撃するということは、すごいエネルギーのいることです。この床板を燃やすくらいのはファイブがなかつたら絶対だめです。しかしおもしろいのは床板を燃すまでの間に、この無精者の妻と住んでおったということです。だからこの無精者のアニマというのは、old wise manを引き出してくる仲介

になっているわけです。

ここで、この男は、殿さまをなぐってしまつてそして金を得る。そしてこの夫は最後は貧乏神を置いておいて奥さんを離縁しちゃうわけです。そして何を得たかといつたら金を得たわけです。この辺が非常に問題です。というのは、そうしたらこの男は一生独身でいくのか、この捨てられた奥さんはどうなっていくのか、あるいは次はどうなるのかということになります。これはだから、おとき話というのは、われわれの自己実現の物語のはじめから終わりまでを書いているのは非常に少ないのです。どこか一部分を切りとつて書いている場合が多いのです。中にはものすごく素晴らしいお話があつて、本当に長い自己実現の物語をずっと書ききつているものもあります。たとえば「エロスとプシケ」の話などは相当長い女性の自己実現の物語が書いてあるとぼくは思います。ところがこの貧乏神は男性の自己実現のある一部分です。つまり一応まず怠け者、つまりまず「Jeeression」というところから始まつて、そしてついに転回点がきて「proression」が始まる。そして老人より得た一つの知恵を断行し実行する。つまり火とかお酒に比べると、金となつてみると自分が本当に使えるものです。ここまで獲得しえたというところで終りになっているわけです。ここからもつと話が続くならば、この人はまだ本当の意味の女性を獲得しなければなりません。

ん。今度は無精者でない女性を獲得しなければならぬけれど、それは今後のお話として残されているわけです。だからおとき話というのはそういう人間の自己実現の物語の一つの断片が切りとられてそこだけ非常に拡大して書いてあると思うのです。あるお話は非常に小さいところのことが書いてありますし、あるお話は非常に大きいところのことが書いてあると思うのです。ところで、ぼくは一時こうも思つたのです。今はもうそうは思いませんが、私が一時思つたことは、ここで男が金を獲得して女を獲得しなかつたという。むしろ女を捨てたということは、これは日本の童話の特徴かなと思つたことがあるのです。外国の場合は、王子さまとお姫さまが結婚しました、おわり。というのがものすごく多いでしょ。それに対してこちらはお姫さまを放り出してお金をもらつている方ですね。だからこれが日本の特徴かと思つたのですがそう軽々しく断定できません。日本にも結婚してめでたしめでたしという話がたくさんありますから。ただ日本の物語の中にはこういう断片を描いているのが非常に多い、つまり結婚までいかないまでの話が多いと言えますけれども、女をすてて金を得ることが日本の特徴とは言いかねるようです。しかし後で言いますように、やっぱり最後のところを結婚にもっていくのは日本人の心性としてはなかなかむずかしいだろうと思ひます。一人の男性と一人の女性が同等に結ばれ

### creative-regression

るということは日本人にとってはほとんど不可能に近いほどむずかしいことのように今でも思います。だからおとぎ話としてもやっぱり少ないように思うんですが、それはまああまり断定的なことを言わずにおくことにします。

ところで今、貧乏神の解釈をしたわけですが、貧乏神の話をこの男性を主人公と考える。この前言ったと思いますが、おとぎ話というのは出てくる人が非常に単純なように思うけどもそれは単純なのが当り前で、その単純な人たち全部で一人の人間の心を表わしていると思うとよくわかる。貧乏神が一人、奥さんが一人、男が一人じゃなくて、あの男は自我を表わしており、その男の心の中のアニマ的な要素とかold wise man的な要素があつて、一人の人間の心を書いているのだと思うとよくわかります。それからさっき言いましたがずっとregressionが行なわれて、そして次にprogressionが生じて、ついにはこの男が、殿さまをなぐるというふうなすごい自我の強さを発揮します。こういうことを考えますとregressionということは必ずしも悪いことではないんだ。むしろこういう非常に新しい創造的なことをやるためには必ずregressionがおこらねばならないんだという事です。これは、フロイトがregressionを言い出した時は、フロイトにとってはregressionというのは非常に病的なものと思われたわけです。もちろん病的な場合が多いわけです。

しかし、そういう病的なregressionに対して新しいcreationがおこるためには必ずregressionがおこらねばならないというのをユングは非常に強調したのです。regressionの極まるころにprogressionというのが生じてきて、だからすべてそういうcreativeなprocessの前にregressionがおこるとユングは言ったわけです。ユングは早くからそういうことを言っていたのですが、それに対してフロイト派の人たちはregressionは病的だと言っていたのです。だんだん時代が変わってきましたと、フロイト派の人たちの中にもregressionの意味を認める人たちが出てきました。これも皆さんは講義で習ったかも知れませんが、フロイト派の人の中で芸術を研究したクリスとかハルトマンとか、自我心理学者と一般に呼ばれている人たちです。フロイト派の人たちの中で自我心理学者と呼ばれている人たちがregressionの中でも意味のあるのがあつて、それをregression in the service of the Ego という言葉で言いました。ぼくはアメリカに行つてこの言葉を聞いて本当に感激しました。あるいはもっと端的に言つて creative regression などと言う言葉もあります。regression in the service of the Ego というのは簡単に訳して「自我のための退行」と訳したりしています。

なかなかいい訳語がないので困っているのですが、creative regressionの方は創造的退行、これはもう、そのものピタリですね。これはなかなかいい言葉です。結局創造的退行ということはどういうことかと言いますと、私が昨日から強調してますように怠けることに価値があるといえます。怠けるのはつまり regression をおこすことによって無意識下にはいつていつてその無意識下の知恵というものをどこかで獲得して、つまり貧乏神の知恵を獲得して、ついに progression をおこした場合というのは創造的な生き方につながるという、こういう考え方はです。だからぼくは非常に好きなのです。こういう言葉がね。

ところがですね。regression in the service of the Ego と Ego がついているということは単なる regression ではなくてやっぱり自我というものをしっかり持ちながら regress している。つまりはじめのうちこの男は怠け者の奥さんと結婚して奥さんの言うままに生きておったということちょっと病的な regression にかかったわけですね。その病的 regression をやっているうちに板を燃やすあたりから in the Ego、つまり意識化するということが出てきたわけです。そうするととうとう貧乏神がやってきて、そして貧乏神の言いつけをきいてやるというのは regression in the service of the Ego から次に progression の方に変わっていったわけです。そうい

うふうに考えるとよくわかる。ところがね、Ego なし regression というものはぼくがさっき言った怠けてばかりいるやつでもうお話になりません。そのお話にならない話が、ちゃんと話に出てきまして、(笑) それがこの前にいいました「天にのぼった息子」という話です。おとぎ話というのはそういうふうにして見ますと、必ずいいのがちゃんとあるものです。昨日は言わなかったので、少し物語りをよんでみましょう。

### 「天にのぼった息子」

あるところに一人の若い男があった。毎日怠けてばかりいるのでとうとう親に勘当されてしまった。仕方がないのでどこぞへ奉公でもしましようと思つて歩いていると、ある家の垣の中のでいさえいさとごぼう抜きをしていた。そこで「どうぞ私を雇うてつかわりませ」と頼むとすぐおいてくれた。ある日いつものようにごぼうを抜いていると一本の大きなごぼうがなかなか抜けないので、うんというて力を入れた途端スポンと抜けて大阪の桶屋町まで飛ばされてしまった。そこで一軒の桶屋に行つて「どうかおいてつかわりませ」と言うるとすぐに承知して、おいてくれた。そこで桶のたがをはめる役をしていた。そこでとんとんとはめておつたところが桶のたがにパンと飛ばされて、東の傘屋町まで飛ばされてしまった。そこでまた「どうかおいて

てつかわりませ」と言つてそこで今度傘を持っていたら傘が飛ばされて、とうとう天まで飛ばされてしまいました。そこで天で向こうの方へ行きますと一軒の家があります。女がおるので「どうぞおいてつかわりませ」言うたら女がびっくりして「こは雷さまの家ですから今留守だから戻ってきたら聞いてあげましょう」と言つて聞いてくれた。雷が「それなら毎日わしの後からついてきて、雨を降らす役をしてくれ」と言うんです。それをやりまして雷の後からついてきてパーパー水をまいたら下界では雨が降つた言うので面白がつてどんどんどこやつていゝうちに雲を踏みはずしてやれしもうたと言つてゐるうちに海の中にどぶんと落ちます。こんどは落ちて落ちて龍宮まで行きます。龍宮で「どうかおいてつかわりませ」と頼むとですね、ちやうど庭はきがないのでやつてくれと言われるのです。それで庭はきをやつておりますと、うまそうな物が上から降つてきたのでパクンとくわえるとそれは漁師が釣りをしていたので漁師に釣り上げられます。そして大勢の漁師が人魚がつれたと言つて大騒ぎをしていると「まあほつといつてつかわりませ」と言つて、ごぼう抜きから龍宮の庭はきになるまでの話をする、漁師たちも感心して車で送つてくれたそう。それから親の言うことをきいてよく働くようになったということである。それもひと昔。これで終りです。

これは結局自我というものがはっきりとしていないわけですね。ほいほいほいほい飛ばされては、飛ばされたところで置いてつかわりませ（笑）と言つて結局最後は国に帰つて同じことです。なんにも変化はないわけです。結局 *transom* するということです。なにかありえない。というのは *regression* する時に自我の関与がはっきりしていないわけですね。つまり傘屋に行くならなせ傘屋に行ったのか、飛ばされたのだったそれがいったいどうしたかではなく、行ったところで必ずおいてつかわりませと言つてゐるのはいかに自我の判断抜きの *regression* を行なつてゐるか、そして結局はまわりまわつて天から龍宮までまわつて、言うてみればそれだけ無意識の世界にはいりこんでいきながら、最後のところはもとのところだったというのは非常にいい話。いい話というのはいかに怠け者というのが単なる怠け者ではなんにもならないというお話です。だから本当におとき話というのはよくできていまして、怠け者なら怠け者というのをいろいろ読んでいますといろんな怠け者が出てくるわけです。

(つづく)

後記 少し前講の内容と重複するところがあったが、ご寛容をお願いする。